

令和4・5年度

共通教科「家庭」における衣生活に関する指導の充実に向けて
～家庭科技術検定の活用を通して～

公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会
全国高等学校長協会家庭部会

技術検定調査研究委員会

目 次

I	研究主題の設定及び調査研究内容	1
1	研究テーマ	
2	調査研究の趣旨	
3	調査研究の内容	
II	調査研究委員会活動	2
1	調査研究の期間	
2	調査研究委員	
3	令和4年度調査研究委員会の主な活動	
4	令和5年度調査研究委員会の主な活動	
III	調査研究	
1	アンケート調査	3
(1)	アンケート調査の概要	
(2)	アンケート調査の結果	
2	家庭科被服製作技術検定新4級プレコンクール	6
(1)	募集要項	
(2)	応募状況及び選考結果	
3	授業研究	7
(1)	依頼内容	
(2)	依頼先	
(3)	授業研究報告	
IV	まとめ	8
	[資料]	
1	アンケート調査依頼文書 <資料1-1、1-2、1-3> 令和4年度家庭科技術検定に係る調査について（依頼）	9
2	家庭科被服製作技術検定新4級プレコンクール <資料2-1、2-2、2-3> 家庭科被服製作技術検定新4級プレコンクール応募用紙及びポスター	11
3	授業研究依頼文書 <資料3-1、3-2> 家庭科技術検定調査研究に係る授業研究について（依頼）	13
	《授業研究報告》	15
	《技術検定関係資料》	45

I 研究主題の設定及び調査研究内容

1 研究のテーマ

共通教科「家庭」における衣生活に関する指導の充実に向けて ～家庭科技術検定の活用を通して～

2 調査研究の趣旨

家庭部会 70 周年・家庭科技術検定 60 周年記念事業は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて 1 年延期ののち、令和 4 年度に実施の運びとなった。さらに、事業の一環として、「家庭科技術検定（実技）に係る DVD 作成及び無償配付」が実現した。振り返れば家庭科技術検定は、60 年もの長きにわたり、生徒が家庭科で学ぶ知識や技能の確実な定着と、教員の指導力の向上に大きく寄与してきた。

この間、家庭科技術検定を運営してきた財団法人全国高等学校家庭科教育振興会は、平成 23 年度に公益財団法人化した。これにより、一層の公益性、検定内容の質の確保、評価の透明性の確保と受検者の裾野を広げることを目的に、以下のとおり研究を重ね、提言及び実践事例等を提示してきた経緯がある。

○平成 24・25 年度 「公益財団法人認定に伴う家庭科技術検定の運営について」

○平成 26・27 年度 「家庭科技術検定の社会的評価を高めるために」

○平成 28・29 年度 「家庭科技術検定の社会的評価を高めるために～質の向上と 4 級受検者の増加を目指して～」

さらに、平成 30 年には、令和 4 年度入学生から年次進行で段階的に適用される高等学校学習指導要領が告示されたことにより、以下のとおり研究を進めた。

○平成 30・令和元年度 「新高等学校学習指導要領を踏まえた家庭科技術検定の在り方」

〔提言〕被服製作技術検定 4 級の試験内容は、「ミシン縫い」を除き「手縫い」のみとする。

○令和 2・3 年度 「ICT を活用した家庭科技術検定の更なる充実に向けて

～家庭科技術検定指導における ICT の活用～」

以上の研究により、新学習指導要領に沿った効果的な検定内容の再構築と、教員の資質向上に資する成果を得ることができた。その一方で、高等学校等在籍生徒数の減少と新型コロナウイルス感染症の影響と思われる「家庭科技術検定受検者数の減少」、また、新高等学校学習指導要領の実施に伴う「指導と評価の一体化（3 観点に基づく学習評価の改善）」「働き方改革」等に係る新たな課題が明らかになった。

さらに、平成 28 年度の普通教育調査研究委員会の調査で、家庭部会会員校のうち普通科を設置する高等学校 1,201 校に調査依頼し、810 校（67.4%）から回答を得た結果、衣生活（被服管理と着装）は 35.7%の教員が「指導が十分にできていない」と回答し、その理由は「全体の指導時間が限られている」が 79.6%であった。

本調査研究委員会では、これまで、家庭科技術検定受検の促進を目的に具体的な方策を提案してきたが、「全体の指導時間が限られている」ことが、受検者増につながらない一因と考えられる。そこで、本調査研究は、衣生活の指導に対して、「全体の指導時間が限られている」ため「指導が十分にできていない」という教員の課題解決の一助となるとともに、家庭科技術検定の振興に資することをねらいとした。

3 調査研究の内容

(1) アンケート調査

① 調査対象校 令和 4 年度部会加盟校のうち、普通科と他学科併設校及び総合学科単独校 556 校

② 調査内容

- ・「衣生活と健康」（家庭基礎）、「衣生活の科学と文化」（家庭総合）の指導状況
- ・被服製作技術検定 4 級の実施状況

(2) 家庭科被服製作技術検定新 4 級プレコンクール

- ・令和 6 年度から新内容で実施する被服製作技術検定 4 級について周知するとともに、生徒の創意工夫する意欲を引き出し、主体的に製作に取り組む態度を培うことを目的とする。また、選考規準を観点別に示し、実技指導における観点別評価研究の一助に資する。
- ・全国の高等学校及び特別支援学校、指定技能教育施設の生徒を対象とする。

(3) 授業研究

- ・令和 6 年度から実施する被服製作技術検定 4 級（ポケットティッシュケース）の製作を取り入れ、複数の単元の学習内容を組み込んだ授業研究を 3 校に依頼。

II 調査研究委員会活動

1 調査研究の期間

令和4年7月～令和6年3月

2 調査研究委員（〇は委員長）

【令和4年度】

- 名塚 康恵（群馬県立前橋清陵高等学校長）
- 富川 麗子（東京都立東村山高等学校長）
- 片岡 潤子（岐阜県立岐阜総合学園高等学校長）
- 江頭かおり（佐賀県立牛津高等学校長）
- [事務局]
- 加藤 路子（事務局長）
- 高橋 靖子（主幹）

【令和5年度】

- 片岡 潤子（岐阜県立岐阜総合学園高等学校長）
- 江頭かおり（佐賀県立牛津高等学校長）
- 須川 史子（群馬県立富岡実業高等学校長）
- 津田 富代（倉敷市立倉敷翔南高等学校長）
- [事務局]
- 加藤 路子（事務局長）
- 名塚 康恵（参事）

3 令和4年度調査研究委員会の主な活動

- (1) 第1回調査研究委員会 令和4年7月4日（月）
 - ① 調査研究の進め方（年間計画）
 - ② 研究テーマについて（技術検定を取り巻く）
 - ③ 調査研究の方針及び内容
- (2) 第2回調査研究委員会 令和4年9月27日（月）
 - ① アンケート調査の内容検討
 - ② 調査対象校の抽出
 - ③ 秋季研究協議会（福井大会）中間報告について
- (3) 第3回調査研究委員会 令和4年11月22日（火）
 - ① アンケート調査の内容検討
 - ② 今後の調査研究の進め方
 - ③ プレコンクールの募集要項・評価規準・ポスターの検討
- (4) 第4回調査研究委員会 令和5年2月11日（土）
 - ① プレコンクール募集要項の決定
 - ② 授業研究先の決定

4 令和5年度調査研究委員会の主な活動

- (1) 第1回調査研究委員会 令和5年6月20日（火）
 - ① 令和4年度調査研究の確認
 - ② 令和5年度調査研究計画
 - ③ アンケート調査結果の検討
 - ④ プレコンクールの募集・選考方法の確認
- (2) 第2回調査研究委員会 令和5年10月19日（月）
 - ① プレコンクール一次選考方法
 - ② プレコンクール一次選考
 - ③ プレコンクール二次選考方法の確認
 - ④ 報告書作成手順
- (3) 第3回調査研究委員会 令和5年12月18日（月）
 - ① プレコンクール二次選考
 - ② アンケート調査結果の分析・考察
 - ③ 実践事例報告書の確認
 - ④ 報告書作成のスケジュール
- (4) 第4回調査研究委員会 令和6年1月25日（木）
 - ① プレコンクール結果の確認
 - ② 報告書の作成

Ⅲ 調査研究

1 アンケート調査

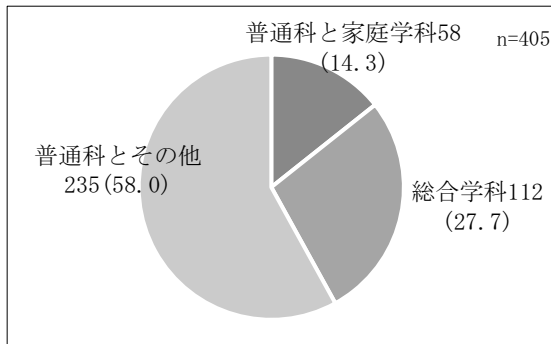
(1) アンケート調査の概要

- ① 調査期間 令和4年12月16日～令和5年1月20日
- ② 調査対象
 依頼校数 556校
 「普通科と家庭学科の併設校」74校、「普通科とその他の学科の併設校」320校、「総合学科」162校
 回答校数 405校 (回答率72.8%)
- ③ 調査内容 <資料1-1、1-2、1-3> 参照 (p.9～10)

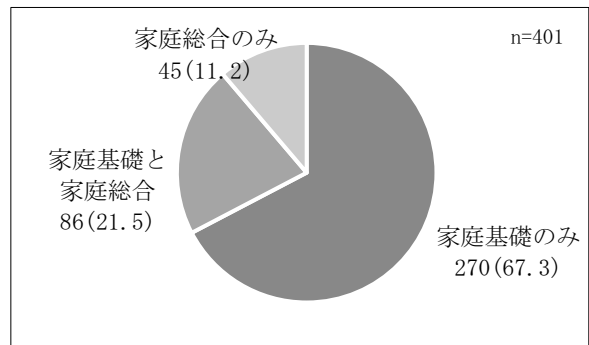
(2) アンケート調査の結果 ※グラフ内の数は校数、()内は%

① 学校概況について

ア 設置学科



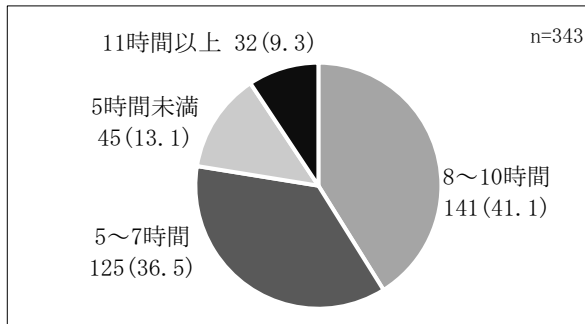
イ 共通教科「家庭」の開設科目 (令和4年度入学生)



「家庭学科併設校」が14.3%、「総合学科」が27.7%、「普通科とその他」が58.0%であった。開設科目は「家庭基礎のみ」が67.3%、「家庭基礎と家庭総合」が21.5%、「家庭総合のみ」が11.2%であった。

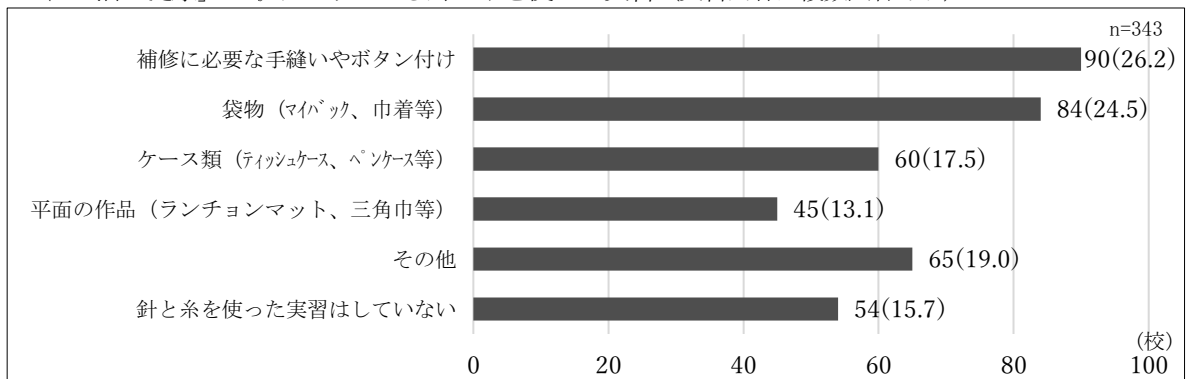
② 「家庭基礎」における「衣生活と健康」の指導について

ア 「衣生活と健康」の配当時数



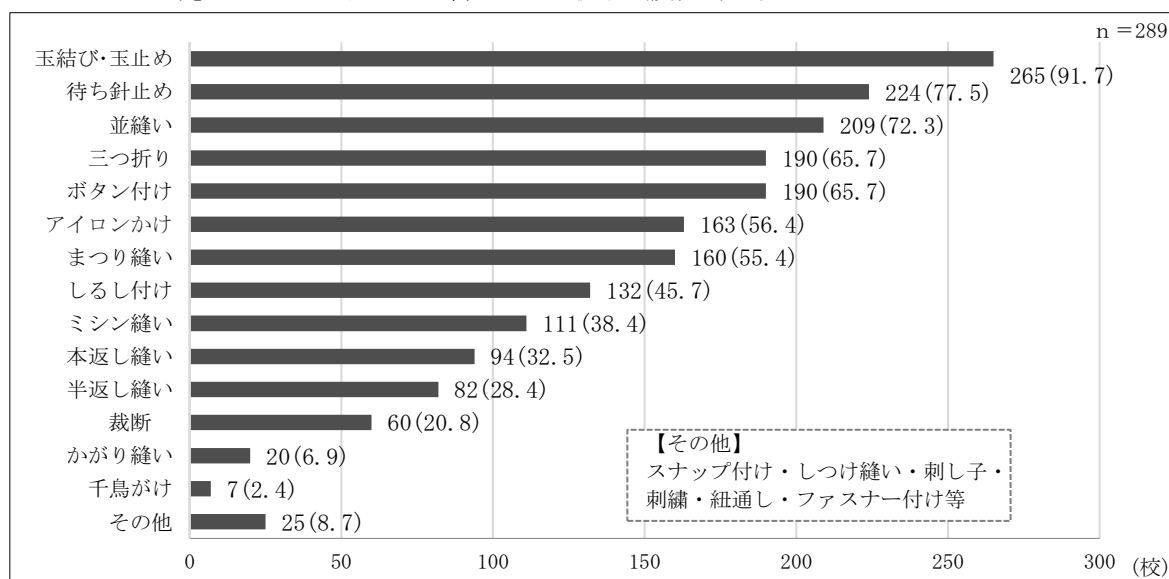
配当時数は、「8～10時間」が41.1%と最も多く、次いで、「5～7時間」が36.5%であった。一方、「5時間未満」は13.1%であった。

イ 「衣生活と健康」で取り上げている針と糸を使った実習 (実習内容は複数回答あり)



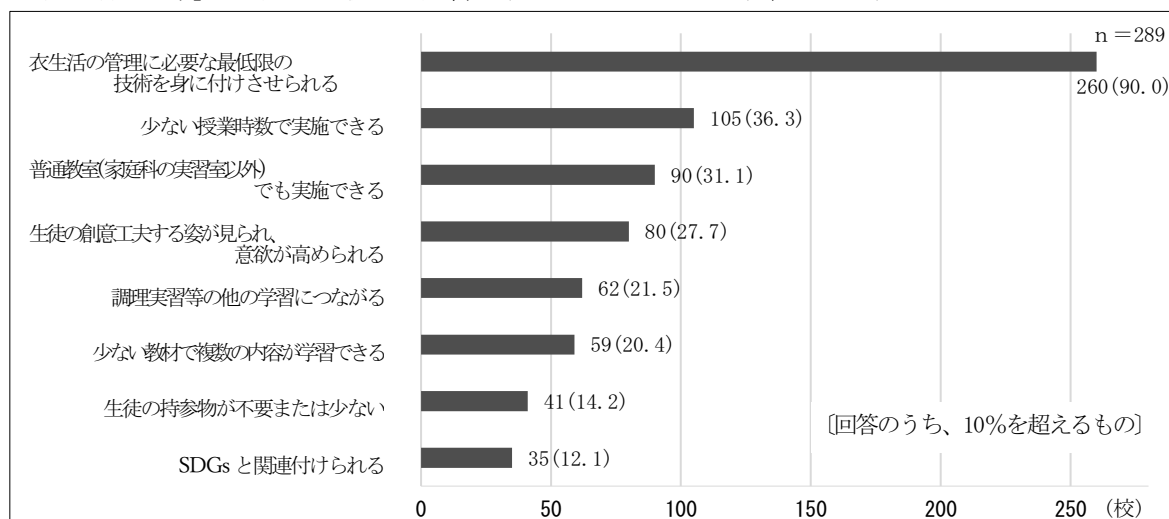
「針と糸を使った実習はしていない」は54校で、全体の15.7%であったことから、84.3%の学校が「針と糸を使った実習」を行っていることが分かる。「補修に必要な手縫いやボタン付け」が90校(26.2%)で最も多く、次いで「袋物(マイバッグ、巾着等)」84校(24.5%)、「ケース類(ティッシュケース、ペンケース等)」60校(17.5%)であった。「その他」では、マスクケースや防災頭巾など今日的課題に対応したのものもあった。

ウ 「衣生活と健康」で針と糸を使った実習に用いる技能（複数回答可）



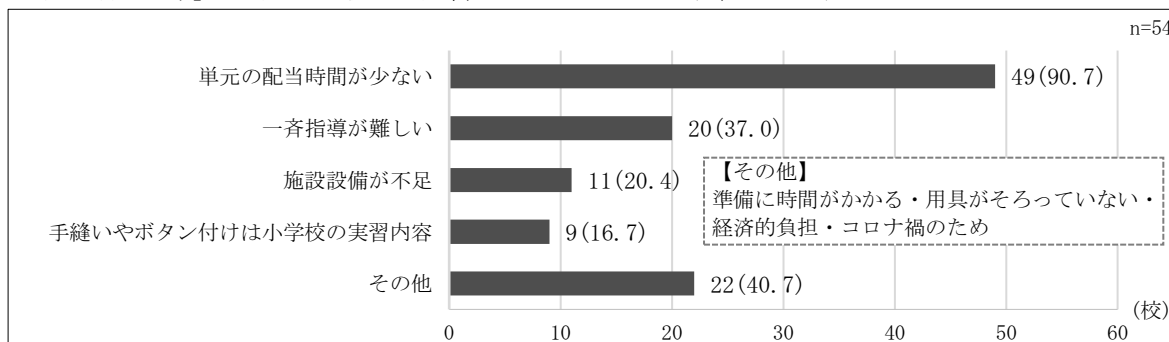
「玉結び・玉止め」が265校（91.7%）で最も多く、次いで「待ち針止め」224校（77.5%）、「並縫い」209校（72.3%）、「三つ折り」190校（65.7%）、「ボタン付け」190校（65.7%）、「アイロンかけ」163校（56.4%）、「まつり縫い」160校（55.4%）であった。いずれも、被服の有効活用や補修などに必要な技能である。

エ 「衣生活と健康」で針と糸を使った実習を取り入れている理由（上位3つまで）



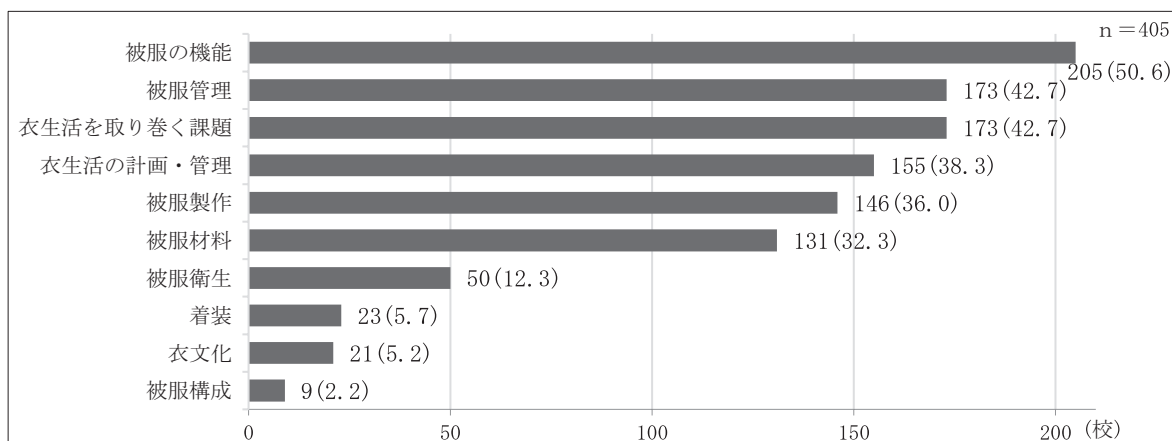
「衣生活の管理に必要な最低限の技能を身に付けさせられる」が260校（90.0%）で最も多く、次いで「少ない授業時数で実施できる」105校（36.3%）、「普通教室（家庭科の実習室以外）でも実施できる」90校（31.1%）、「生徒の創意工夫が見られ、意欲が高められる」80校（27.7%）であった。

オ 「衣生活と健康」で針と糸を使った実習をしていない理由（上位3つまで）



「単元の担当時間が少ない」が49校（90.7%）で最も多く、次いで「一斉指導が難しい」20校（37.0%）であった。「その他」には「コロナ禍のため」などがあつた。

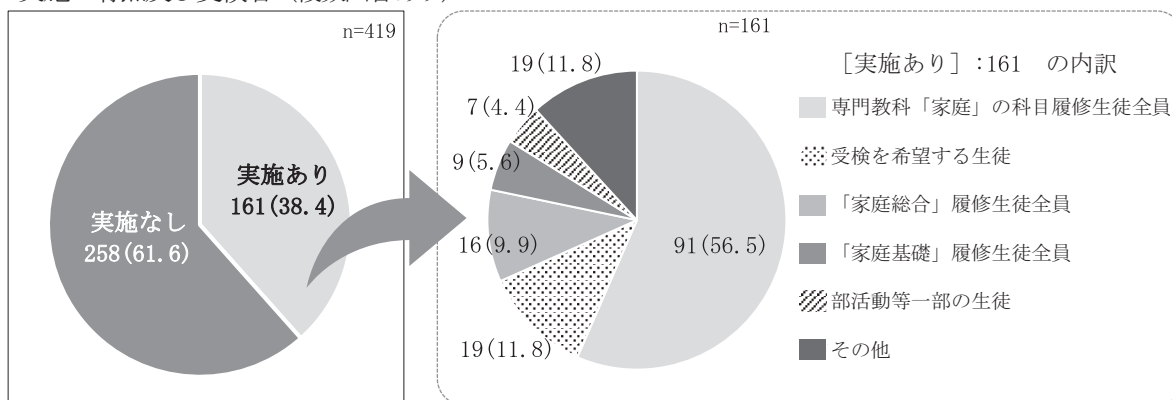
③ 「衣生活と健康」（家庭基礎）及び「衣生活の科学と文化」（家庭総合）において重きを置いて指導している項目について（上位3つまで）



「被服の機能」が205校（50.6%）で最も多く、次いで「被服管理」と「衣生活を取り巻く課題」が173校（42.7%）、「衣生活の計画・管理」155校（38.3%）であった。

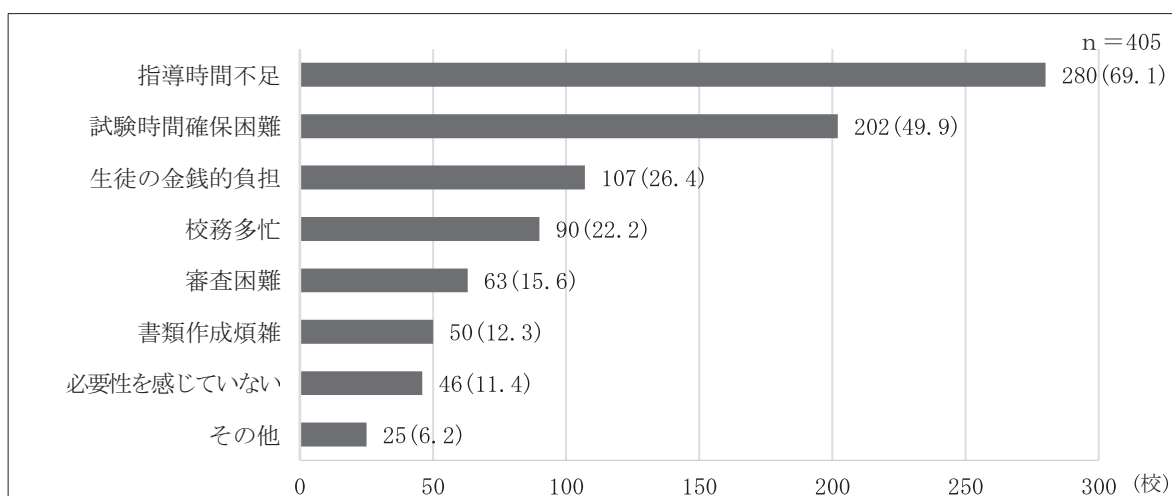
④ 被服製作技術検定4級について

ア 実施の有無及び受検者（複数回答あり）



被服製作技術検定4級の「実施なし」が258校（61.6%）で、「実施あり」は161校（38.4%）であった。実施校における受検者は、「専門教科『家庭』の科目履修生徒全員」が91校（56.5%）と最も多く、次いで「受検を希望する生徒」19校（11.8%）であった。「必履修教科『家庭』の履修生徒全員」は、「家庭総合」では、16校（9.9%）、「家庭基礎」では9校（5.6%）と少ない。

イ 被服製作技術検定4級実施が困難な学校における実施が困難な理由（上位3つまで回答可）



「指導時間の不足」が280校（69.1%）と最も多く、次いで「試験時間の確保が困難」202校（49.9%）であった。

2 家庭科被服製作技術検定新4級プレコンクール <資料2-1、2-2、2-3>

(1) 募集要項 全国専門委員会（令和5年5月開催）並びに当部会及び当振興会のWebページにて案内

- 1 主催
公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会 全国高等学校長協会家庭部会 家庭科技術検定調査研究委員会
- 2 目的
令和6年度から新内容で実施する全国高等学校家庭科被服製作技術検定4級について周知するとともに、生徒の創意工夫する意欲を引き出し、主体的に製作に取り組む態度を培うことを目的とする。
- 3 応募資格 高等学校等（特別支援学校や指定技能教育施設を含む）の生徒。
- 4 募集要領
 - (1) 部門及びテーマ
「技術・技能※」「伝統文化継承」「SDGs」「デザイン」の4部門とし、テーマは自由に設定。
注「技術・技能」は装飾を含めた全体的な技術・技能。
 - (2) 募集作品規定
・被服製作技術検定新4級に準じた作品（裏面にポケット口のあるポケットティッシュケース）とする。
・用布・糸・ボタン・その他の材料は自由。
・「並縫い」「まつり縫い」「ボタン付け」は必ず入れ、「半返し縫い」は入れなくてもよい。
・仕上がりの大きさは、9cm×12cm程度とする。
参考型紙は、当振興会Webサイト（<http://www.katei-ed.or.jp/>）からダウンロード可。
・キャラクターなどの著作権を侵害しないものとする。
 - (3) 応募方法
・生徒は、応募用紙（生徒用）に記入し、作品の写真を添付して、学校を通して応募する。
・学校は、応募用紙（学校用）に記入し、生徒の応募用紙をまとめて送付する。
・一次選考通過者は、本会からの通知を受けたのち、学校を通して作品を送付する。
- 5 選考規準
 - (1) 一次選考（書類選考）
・部門に即した材料や技法が効果的に用いられているか。[知識・技能] [思考・判断・表現]
・応募用紙に作品製作の意図や意欲が適切に表現されているか。[思考・判断・表現] [主体的に学習に取り組む態度]
・部門に対する知識や理解を主体的に深めようとしたか。[主体的に学習に取り組む態度]
 - (2) 二次選考（作品選考）
・「並縫い」「まつり縫い」「ボタン付け」が適切にできているか。[知識・技能]
・部門やテーマに沿った作品になっているか。[思考・判断・表現]
・仕上げが丁寧で、機能性のある作品か。[知識・技能] [主体的に学習に取り組む態度]
- 6 選考委員及び選考結果発表（予定）
 - (1) 一次選考 家庭科技術検定本部委員長（校長）4名、令和5年10月
 - (2) 二次選考 技術検定監修（名誉教授等）2名、家庭科技術検定本部委員長4名、令和5年12月
- 7 賞 個人賞：「最優秀賞」各部門1点、「優秀賞」各部門2点、学校賞1～2校
・入賞者及び学校賞校には、賞状及び記念品を贈呈する。
・入賞者の作品は、令和6年5月開催の家庭科技術検定全国専門委員会において展示した後に返却する。
- 8 応募期限 令和5年9月29日（金）必着
- 9 送付先・問合せ先
〒102-0071 東京都千代田区富士見一丁目5-6
公益財団法人 全国高等学校家庭科教育振興会 「プレコンクール」係
Tel 03-3261-0617 FAX 03-3288-1670 E-mail: katei-ed@katei-ed.or.jp

(2) 応募状況及び選考結果 応募作品総数 766点 (32校)

① 個人賞及び学校賞

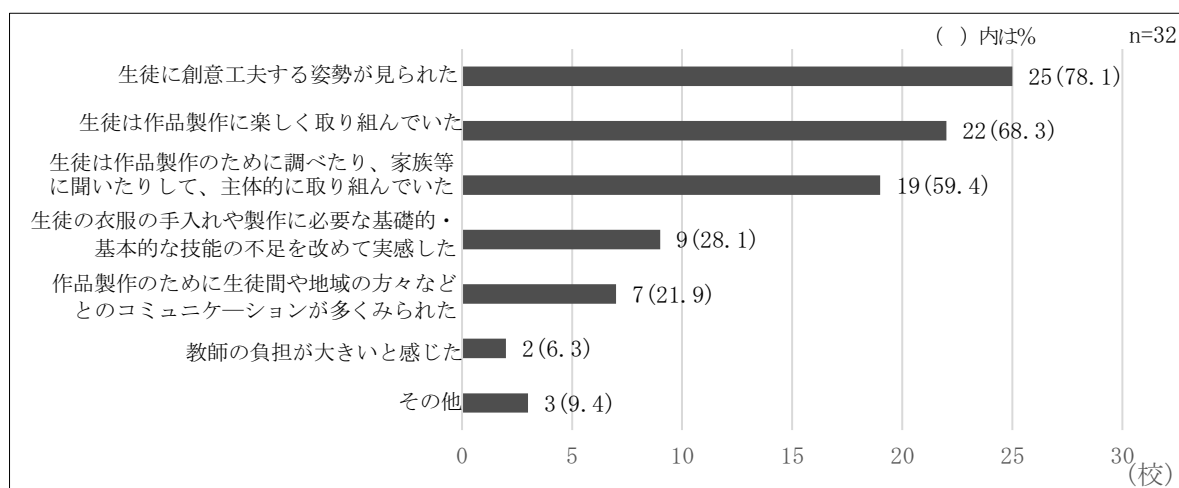
	技術・技能部門	伝統文化継承部門	SDGs 部門	デザイン部門
応募作品数	128点	67点	242点	329点
個人賞	最優秀賞 岐阜県立 岐阜城北高等学校 3年 桶本 萌香	佐賀県立 牛津高等学校 2年 大谷 舞桜	岐阜県立 岐阜城北高等学校 3年 和田 夏美	岡山県立 総社高等学校 2年 河合 優季
	優秀賞 佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校 3年 秦 菜央	岐阜県立 岐阜城北高等学校 3年 原田 ねね	佐賀県立 牛津高等学校 2年 宮原 萌	岡山県立 総社高等学校 2年 光畑 千夏
	佐賀県立 牛津高等学校 3年 川越 彩愛	千葉県立 佐倉東高等学校 3年 渡邊 瑞稀	聖和女子学院 高等学校 1年 萩原 彩乃	佐賀女子短期大学付属 佐賀女子高等学校 1年 北嶋 英理
学校賞	茨城県立水海道第二高等学校、岡山県立総社高等学校、佐賀県立牛津高等学校			

※個人賞作品の写真は、次のWebサイトに令和6年度末まで掲載

全国高等学校長協会家庭部会 <http://www.kateibukai.jp/>

公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会 http://www.katei-ed.or.jp/shinko/hifuku_chouri.htm

② コンクール応募に当たっての生徒の様子や感想 (担当教諭回答、複数回答可)



③ 審査員講評

< 技術・技能部門 >

- ・授業で学んだ手芸の技法をふんだんに用いた凝った作品や、時間をかけて丁寧に仕上げた作品が多く、熱心に取り組んだ様子が伺える。技術レベルが高く、配色、デザインも素晴らしい。
- ・耐久性と使いやすさをさらに向上させるのであれば、デザイン上で、刺繍糸が引っかからないような配置の工夫が必要である。

< 伝統文化継承部門 >

- ・染色、こぎん刺し、つまみ細工など、手仕事の伝統文化をよく調べてデザインに生かし、落ち着いた作品が目立った。全体にレベルが高く、意欲的であった。デザインに工夫もあり、若いセンスも感じられ、現代の感覚も大事にしていることが伺える。
- ・染色やろうけつ染めのデザインに、やや既視感があるので、高校生の自由な発想が加わればよい。

< SDGs 部門 >

- ・「SDGs」のテーマに対して、海の豊かさ、平和への願い、食品ロスの問題等、単に余り布のリメイクというだけの捉えではなく、メッセージを込めたもの、素材を再利用したもの、作品を長く使えるよう工夫したものなど、多様な視点があることを気付かされた。
- ・布を使ったポケットティッシュケースを製作するに当たり、洗濯等の被服管理の視点にも配慮した材料選びが必要である。

< デザイン部門 >

- ・ティッシュケース全体をキャンバスに見立てたような、バランスよいデザインのものも多くあった。刺繍やパッチワークなどの技法を用い、構造を生かしたコミカルなデザインのものも多く、4級検定題材が楽しく活用してもらえる可能性を感じた。
- ・やや使いにくそうな作品もあり、機能性について配慮が必要である。

3 授業研究

(1) 依頼内容

令和6年度から実施する家庭科被服製作技術検定4級(ポケットティッシュケース)の製作を取り入れ、複数の単元の学習内容を組み込んだ授業計画の立案・実践をする。<資料3-1、3-2>

(2) 依頼先

- ・茨城県立水戸桜ノ牧高等学校 飯田 純子 教諭
- ・岐阜県立岐阜総合学園高等学校 堀江 雅子 教諭
- ・佐賀県立小城高等学校 服巻 昌子 教諭

(3) 授業研究報告

別掲 (p.15~43)

IV まとめ

「共通教科『家庭』における衣生活に関する指導の充実に向けて ～家庭科技術検定の活用を通して～」をテーマに、2年間にわたって調査研究を行った。家庭科の学習のねらいとする「生活の自立」、「持続可能な社会の構築」の視点から、「衣生活」の指導について、アンケート調査結果の概要及び分析・考察を以下にまとめる。

■アンケート調査

○「家庭基礎」の「衣生活と健康」の配当時数は、「8～10時間又はそれ以上」が50.4%と半数を超え、一方で「5時間未満」は13.1%であった。そのような中、84.3%の学校が「針と糸を使った実習」を取り入れている。実習の内容としては、「玉結び・玉止め」「待ち針止め」「並縫い」「三つ折り」「ボタン付け」「アイロンがけ」「まつり縫い」などが挙げられている。これらの技能は、小・中学校の既習事項ではあるが、被服の管理・補修など、「衣生活の自立」のうえで必要な技能である。このことは、実習を取り入れている理由としても最も多い。授業では、袋物やケース類などの実習でこれらの技能を取り入れていることが少なくない。

○「衣生活と健康」「衣生活の科学と文化」においては、重きを置いて指導している上位3つが、順に「被服の機能」「被服管理」「衣生活を取り巻く課題」であった。これらの項目は、「衣生活の自立」や「持続可能な社会の構築」のために重要であると考えられる。

○被服製作技術検定4級の未実施校は61.6%である。「実施困難な理由」としては、「指導時間の不足」が69.1%、次いで「試験時間の確保が困難」が49.9%であった。「家庭科技術検定」は、家庭科で学んだ知識・技術の定着を図る目的で、先輩の家庭科教員によって60年以上も前に創設されたものである。改めて、検定の意義を考えてみる必要があるのではないだろうか。

被服製作技術検定新4級は、「並縫い」「まつり縫い」「半返し縫い」「ボタン付け」の技能を用い、試験時間は25分である。「持続可能な社会の構築」の視点から、衣生活における「リフォーム」「リメイク」は大切である。その実践力として、これら新4級で用いられる技能は、最低限、身に付けさせたい。技術検定を通して、被服製作における基礎的・基本的な技能を身に付けさせるとともに、「ものづくりの楽しさ」「達成感」などを味わわせたいと考える。

また、令和5年4月には、「家庭部会70周年・技術検定60周年」記念事業の一環として、技術検定(実技)DVDが無償配付されている。生徒は、QRコードを使って、自学自習できるようになっている。「指導時間の不足」という課題の解決にも役立てていただきたい。

以上のことから、「家庭基礎」でも十分に取り入れやすく、教室での実施も可能なので、ぜひ「被服製作技術検定4級」を活用いただきたい。

■家庭科被服製作技術検定新4級プレコンクール

令和6年度から実施する新内容であるにもかかわらず、32校766点という多くの応募があった。生徒の取組は、「創意工夫する姿勢が見られた」78.1%、「楽しく取組んでいた」68.8%、「主体的に取り組んでいた」59.4%と、教師は高く評価している。「持続可能な社会の構築」に向けて、今日の「ファストファッション」を脱するために、衣類の「リフォーム」「リメイク」に必要な創意工夫や技能を身に付けさせたい。本コンクールへの取組が、「創意工夫」や「ものづくりの楽しさ」につながったことは、喜びである。

被服製作技術検定新4級は、生徒が少ない時間で針と糸に係る技能を高めるとともに、達成感や成就感を獲得し、主体性を伸長する機会になるなど、教育上有効な取組であることを、今後さらに広く発信していきたい。

■授業研究

○実施校は、「衣生活と健康」の単元に6時間から10時間を配当している。

○「衣生活と健康」の指導においては、「C 持続可能な消費生活・環境(2)消費行動と意思決定」や「A 人の一生と家族・家庭及び福祉(5)共生社会と福祉」、「C 持続可能な消費生活・環境(2)消費行動と意思決定(3)持続可能なライフスタイルと環境」などの内容を取り入れながら、実施している。

○ポケットティッシュケースの製作は、古着・古布・残布などを有効に活用している。

被服製作技術検定新4級の内容を活用し、限られた指導時間の中でより効果的な指導が可能となるよう、これらの授業研究報告を掲載するので、ぜひ参考にしていきたい。

おわりに、ご多用の中、アンケート調査にご協力いただいた全国の家庭科の先生方をはじめ、プレコンクールに応募くださった生徒の皆様とご指導くださった先生方、さらには授業研究に取り組んでくださいました3名の先生に、心より感謝を申し上げます。